「ともに拓く未来」のもと、冒険する大学として社会の変革と社会との連携を目指し知の創造とそれを継承する人材を育成する

1973年に「新構想大学」として発足し、昨年、開学50周年を迎えた筑波大学。「あらゆることに開かれた大学」を標榜して、学際性、国際性などの分野で不断の改革を推進してきました。そして、次なる50年に向けて「DESIGN THE FUTURE.～ともに拓く未来～」をスローガンに掲げ、新たな一歩を踏み出しています。

固定化された社会の変革のエンジンとなることで、社会との連携や共創を実現し、新たな価値観の創出を目指しています。2024年度にはチュートリアル教育をスタートするとともに、マレーシアに日本の大学の学位を海外で初めて出すマレーシア校を開設。ノーベル賞受賞者からオリンピックメダリストまでを輩出する筑波大学は、「冒険する大学」として、豊かな未来を築くための人材を養成しています。

永田恭介（ながた きょうすけ）学長

1976年東京大学薬学部薬学科卒業。81年同大学薬学系研究科博士課程修了。専門は分子生物学。国立遺伝学研究所助手、東京工業大学助教授、筑波大学教授などを経て2013年より現職。中央教育審議会副会長、国立大学協会会長も務める。

筑波大学

〒305-8577　茨城県つくば市天王台 1 - 1 - 1　アドミッションセンター　TEL 029-853-7385　https://www.tsukuba.ac.jp/

「変革のエンジン」として豊かな未来を見据える

2023年に開学50周年（創基151年）を迎えた筑波大学は、建学の理念に「あらゆる意味において、国内的にも国際的にも開かれた大学であることをその基本的性格とする」と謳っているように、新構想大学として不断の改革を進めて大きな成果を上げてきました。

そして、次の50年（Next50）に向けた歩みとして、これをさらに発展させ、固定化された社会や大学システムを変革する取り組みが本格的にスタート。「DESIGN THE FUTURE. TOGETHER.（ともに拓く未来）」というスローガンには、まさに筑波大学が社会変革のエンジンとなる、という思いが込められています。

永田恭介学長は「学際性、国際性の分野では、開かれた大学として大いに前進することができました。しかし、これまで見逃されがちだったのは、建学の理念にも書かれている『従来の大学は、ややもすれば狭い専門領域に閉じこもり、教育・研究の両面にわたって停滞し、固定化を招き、現実の社会からも遊離しがちであった』という箇所です。新構想大学の発足に繋がる重要な部分でもあります。

すなわち、これまでは学内の改革を主体に行い、学際性、国際性などについて改革を進めましたが、これからは社会に対して一層目を向けて、社会の変革を後押しすることが重要です。これがDESIGN THE FUTURE. TOGETHER.の基本です。筑波大学の使命は、知の創造とこれを継承する人を育て、豊かな未来を築くことです」と述べます。

チュートリアル教育とマレーシア校の開設

筑波大学では今年度から、いよいよ「チュートリアル教育[1]」がスタートしました。教員と学生が学問的な問題を設定して議論を重ねる「課題ベース型授業（PBL）」で、少人数の学生にチューター教員が配置され、学生の疑問や関心に助言します。今年度は36人の学生が受講、10年後には全学的に導入し、「つくば型チュートリアル学修」の確立を目指します。

また、これと並行して、学住近接型の学生宿舎を全面リニューアルし、チュートリアル教育や社会との共創に対応できる形態に整備する事業にも着手します。1年次全員入居を目指し、2027年度末までに体験入居やショートステイを含む新入生の入居率を80％にすることを目標としています。さらに、宿舎エリアには大学債を活用した未来社会デザイン棟の建設を予定。未来社会デザイン棟は、シンボリックな塔のような外形で、学生のための自由な空間のほか、企業や筑波研究学園都市内の研究機関のショーケース、海外拠点窓口などが入居することを計画しています。

そして、今年9月、日本の大学の学位を海外で初めて出すマレーシア校[2]が、クアラルンプールに開校しました。新たに開設された「学際サイエンス・デザイン専門学群」は、データサイエンスを基軸とし、自然科学、人文社会科学の考え方、技術を深化させるだけではなく、広く環境に関する課題などについて考え、デザイン思考を踏まえつつ創造的に地球規模課題解決に貢献する人材を育成することを目的としています。

数理・データサイエンス・AI教育に関しては、筑波大学は開学当初から、情報処理の講義とコンピュータでの実習の2単位を、文系や体育、芸術などの非理工系分野を含むすべての学士課程の学生の必修科目として開設してきました。2021年度からは、学士課程・修士課程・博士後期課程の各教育組織が、それぞれのカリキュラムに、リテラシー、応用基礎、応用の各レベルの数理・データサイエンス・AI教育を有機的に組み込むことに取り組んでいます。「数理・データサイエンス・AI教育では、将来的には量子科学を文系も含めて必修としたいですね。量子科学は、文系の学生にもこれからは修士課程で学ぶことが必須となってくるでしょう。現在の学士課程4年＋修士課程2年といったシステムを変革して、リベラルアーツ2年＋メジャー4年というようにすることは非常に有用だと考えます」と永田学長。

筑波大学と米ワシントン大学　AI分野におけるパートナーシップに合意
（（左から）レモンド米商務長官、デヴィッド・ザボルスキーAmazon上級副社長、トリシア・セリオワシントン大学プロボスト、永田 恭介 学長、ネッド・フィンクルNVIDIA副社長、盛山 正仁 文部科学大臣）

「産官学金」連携で、新たなイノベーション創出へ

筑波大学は研究型総合大学として、広範な学問分野にわたり世界水準の卓越した研究を展開しています。特に産官学金の壁を越えたニーズドリブン型共同研究を重視しているのが特徴で、その象徴ともいえるのが「IMAGINE THE FUTURE. Forum（ITF）事業」です。筑波大学が、企業や社会の課題を解決し、社会事業にまで広げていく産学連携の画期的な拠点を設置しようというものです。

産学連携で特筆すべきことは、今年4月に米ワシントン大学と結んだAI研究に関する連携協定です。これには、米半導体大手エヌヴィディアと米IT大手アマゾンも参加し、10年間で計5000万ドルを支援することが決まりました。AI研究に加え、人材育成やアントレプレナーシップの涵養、研究成果の実用化、社会実装にも取り組みます。

また、今年8月には、三井住友フィナンシャルグループ（SMBCグループ）と包括的連携協定を締結しました。大学と金融機関の新たな連携モデルを構築し、このモデルを全国に展開することで、科学技術の進展および人材育成を進め、固定化された社会の変革に貢献することを目的としています。両者は、こうした学内の取り組みを地域へ拡大し、スーパーシティ型国家戦略特区に指定されているつくば市の立地を最大限に活用したスタートアップやグローバル企業との共同研究、実証の場の提供などを行っていくことにしています。

筑波のキャンパスで一緒に冒険してみよう

急速な少子化により、大学・短大の志願者が選り好みさえしなければどこかの大学に入れるといってよい「大学全入時代」を迎え、学士課程の入試改革は急務となっています。現在、多くの国立大学で実施している学校推薦型選抜（推薦入試）は筑波大学が他の大学に先駆けて導入したものであり、2021年度入試からは「総合選抜[3]」を導入しています。入学前に専門を決めるのではなく、多様な学問に触れてみてその後に専門を決めることを可能にしたもので、今後はこの総合選抜の比率を高めたり、外国人留学生の比率を増やしたりするなど、新しい入試を導入して、他の大学のモデルになることを模索しています。

こうした現状を踏まえ、筑波大学のキャンパスで学ぶことの意義について、永田学長は「コロナ禍ではオンラインによる授業が4年間にわたって行われましたが、一つのキャンパスに集い、同じ授業を受け議論し、自分は何者であるかを問うことは大きな意味があります。コミュニケーション能力や協調性、リーダーシップも養われます。研究者にとっても重要です。互いの刺激の中で、失敗と思わぬ成功を目の当たりにすることで、セレンディピティが生まれてくるのです」と説明します。

そして、「開学50周年記念式典に登壇してくれた各分野の本学の卒業生・修了生は『人生にとっての最大の冒険は本学で学ぶことであった』と語っています。筑波大学は、従来の開かれた大学というスタンスに加え、社会変革と社会との協働に挑戦していきます。筑波大学で、私たちと一緒に冒険をしてみませんか」と受験生にエールを送っています。

(1) チュートリアル教育

筑波大学は2020年に指定国立大学法人に指定され、その際、「チュートリアル教育の全学的導入」を掲げていたが、今回の授業はその先導的役割を担う。2028年度からの6年間で100人規模に、2034年度からの6年間で1600人規模に拡大する計画。①入学から卒業まで一貫して行われ、②学生が対話と議論を通した学びから専門分野とそれに連なる広範な分野への造詣を深め、③批判的・創造的な視点をもって社会と向き合い、④社会課題への解決策を未来に向けてデザインできる力を養うことを目標とする。

(2) マレーシア校

マレーシア校は、2018年にマハティール・ビン・モハマド首相（当時）に筑波大学から名誉博士号を贈った際、永田学長に分校設置を直接依頼されたことが発端で開設された。マレーシア人とマレーシア国籍以外の学生約40人が入学。文系や理系の垣根を越えた、学際的で課題解決型授業（PBL）を中心とした教育を実現していく。マレーシアの地元企業や日系企業からも講師を招き、学生自ら身近な実社会や世界が直面している問題を掘り下げ、解決策を提案できるような実践的な授業を展開する。専任教員として日本国籍と外国籍の14名が筑波大学本校から赴任する。14名は生命環境から情報工学、比較文学、政治学、サブカルチャー等多岐にわたる専門分野に通じている。

(3) 総合選抜

大学入学前に学群・専門学類を決めるのではなく、1年生の終わりに志望する学群・専門学類を決めるというもの。一般選抜の定員の約25%を募集人員とし、受験生は文系、理系Ⅰ、理系Ⅱ、理系Ⅲのいずれかの区分を選択して受験し、入学後は総合学域群の所属となる。いずれの選抜区分で入学しても、体育専門学群を除くすべての学群・専門学類に進める。